編集後記

本号には特集を二つ組んでいる。**ロールズの政治哲学についての特集**と**人間の尊厳についての特集**である。先ずロールズ特集から。

特集1 ジョン・ロールズの政治哲学について述べると、ロールズが二十世紀を代表する政治哲学者で規範的正義論を唱道したことは夙に有名である。我が国でも、田中成明教授を始め多くの学者がロールズの正義論を中心に研究を行い、それらの成果は質量共に相当なものである。ところが、ドイツでは我が国のようにロールズ産業と呼ばれる現象が殆ど見られなかったように思う。そこで、編集者はこの現象自体に何か意味があるのではないかと以前から考えていたこともあって、知人のドイツ人社会倫理学者ハンス・ヨアヒム・テュルク教授に相談をしてみたところ、問題提起に快く応じて論文を本誌のために書き下ろして下さった。ドイツ語文献では、ロールズ学者のトマス・ポッゲの纏った書物は例外に属することで、本誌所収のテュルク論文は、とりわけカトリック社会教説の立場から書かれたものでは、最も詳しい論文、少なくともそのうちの一論文であろう。しかも、この立場からの最新の論文でもあるので、その意義は大きいと思う。フランス法哲学・政治哲学の研究を背景にしておられる神原和宏教授には、ご多忙の中、無理をお願いして、ロールズ論を準備していただいた。それに対して、若手でロールズをいわば専門に研究している福間聡氏には、現在もっとも関心を寄せておられる公共的理性に基づく正当化問題について、力のこもった「理性の復権」というご論稿を寄せていただいた。このように、ロールズに関連する水準の高い論文をお寄せいただいた執筆者各位に対して心から感謝の念を捧げたい。

もう一方の**特集2 人間の尊厳**は、昨年九月に開催された懇話会の模様を再現するものである。但し、質疑応答の部分は文字化されていない。ウルフリット・ノイマン教授は非常に活動領域が広い刑法学者であり法哲学者でもある。その教授の講演「人間の尊厳という原理」は我が国で通有な新カント学派の存在当為二元論の立場から論じられており、これに対して、五名のコメントが寄せられ、懇話会の席ではこれに対する応答がノイマン教授によってなされた。本号にはその返答部分は収録されていない（一部は社会倫理研究所ホームページのニューズレター第十五号 http://www.nanzan-u.ac.jp/ISE/japanese/newsletter/nl05-06.html に掲載してある）。コメントを準備してくださった、高橋広次教授、西野基継教授、井川昭弘氏、平田丈人氏に対し心からお礼申し上げる。特に井川氏にはノイマン教授の講演原稿の翻訳につきたいへんお世話になった。

小泉信三賞受賞記念祝賀懇話会の講演者福岡佐織さんは、懇話会開催時は南山高校女子部三年生であったが、現在は慶応義塾大学文学部に在学されている。経緯の詳細は、本文中の林雅代第二種研究所員による「日常の中の死　尊厳ある死」をご参照頂くこととして、ここでは、社会倫理研究所で開催した行事の中でも特に参加者が多く、尚且つ様々な分野からご参加頂いたことを記録しておきたい。慌しい状況下にも拘らず、懇話会のために新しい報告原稿を準備してくださり、この紀要への公刊にご協力いただいた福岡さんに感謝の意を述べたい。又、本紀要には収録されなかったが、福岡さんの尊祖

父の主治医であった北川喜己氏（名古屋掖済会病院救命救急センター長・救急科部長・外科部長）には懇話会当日もご多忙のなか駆けつけてくださり、コメントまで賜った。記して感謝申し上げる。

論説としては、本誌に既に数々の力作を頂いている宮川俊行教授による新しい論題を掲載することができた。今回の御論考も最新の学界状況を踏まえたものに仕上げられている。平素からのご協力と併せて感謝申し上げる。

社会倫理の基礎コーナーでは、上述特集をも考慮に入れ、今回は人間の尊厳に関わるドイツ語文献を翻訳して紹介することとした。ギュンター・ペルトナー教授はカント哲学の研究から始められ、最近では生命倫理学分野において、しかもその根本的前提について透徹した議論を展開しているお一人であって、掲載論文は伝統的自然法倫理学からの一篇である。

最後に、**書評**コーナーにおいて、近刊の中から二著を取り上げることができた。先ず、昨年度第四回懇話会講師として責任論をお話くださった佐々木拓氏に、大庭健著『「責任」ってなに？』を批評紹介していただいた。次に、『社会と倫理』第十七号にご寄稿くださった秋葉悦子教授のカトリック社会倫理学ないし生命倫理学の立場から纏められた新刊著を取り上げて紹介した。

（奥田太郎・山田秀）